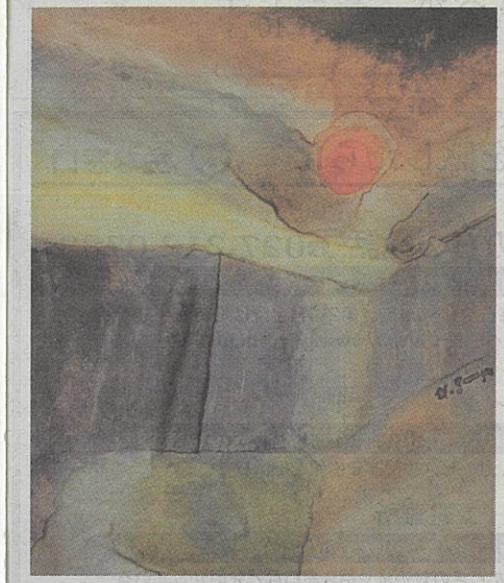


「秋の日」

1989年、ガラス絵
16・3㌢×13・3㌢

清宮質文（1917～91年）

日が短くなり、空気がひんやりとしてくると、夕暮れ時はどこか寂しく感じられます。本作は、そんな秋の光を手のひらにすくい取ったようなガラス絵です。潤む夕日、照らされた雲や道、影を吸い込んで固くたたずむ塀、空と建物の間に強く差す光。抑えた色調の中に夕日の赤が一つともり、静かな風景をつくり出しています。光も色も流れていくようでいて、ひとときとどまり、見るほどにまた揺らぎます。

清宮質文は木版画の制作に取り組む一方、ガラス絵も描き続けました。本作を描いた1989年は、清宮が72歳になる年です。晩年のこの作品には、うつろう一日の光を丁寧に見つめるまなざしがうかがえます。小さなガラス板に広がる秋の色は、いつか見た風景の記憶を呼び起こしてくれるかもしれません。

本作は「秋の彩―日本画コレクション」で10月10日から展示いたします。（小此木）

大川美術館コレクション展
「秋の彩―日本画コレクション」から

《名画の扉》